

々に併合して1時間に60mm以上の豪雨が持続した。

(3) 豪雨期間の前半は、メソ β スケールのエコーセル群が見掛け上豪雨域に停滞していた。この風上で次々に新たなエコーセルが発生し豪雨域で併合していた。後半は風上で発生したメソ β スケールのエコーセル群が豪雨域を通過していた。

(4) 豪雨域の downdraft に伴い顕著な outflow が観測された。豪雨域の南20~40 km に収束域があり、また浜田の北東には大きな発散域があって、これらは豪雨期間を通してほぼ定常的に存在した。

(5) 気温の前1時間差を調べると、豪雨にともない、2~3°Cの気温下降が見られたが、中国山地にさえぎられて南下していない。

謝 辞

気象衛星資料については気象衛星センターに、またそのほかの資料について気象庁予報課にお世話になった。また、笹原秀一松江地方気象台長には本稿を閲読して頂き、貴重な助言を頂いた。ここに厚くお礼申し上げます。

参考文献

Bluestein, H.B. and M.H. Jain, 1985: Formation of mesoscale lines of precipitation: Severe squall lines in Oklahoma during the spring. *J. Atmos. Sci.*, 42, 1711-1731.

長谷川隆司・二宮洗三: 静止気象衛星データからみた長崎豪雨(1982年7月)の特徴, *天気*, 31, 565-572.

早川誠而・鈴木義則・前田 宏・元田雄四郎, 1988: 1983年9月6日の福岡市における豪雨の特徴(1) レーダーエコーを主とした解析, *天気*, 36, 127-133.

Ninomiya, K., H. Koga, Y. Yamagishi and Y. Tatumi, 1984: Prediction experiment of extremely intense rainstorm by a very fine mesh primitive equation model. *J. Met. Soc. Japan*, 62, 273-295.

T. Akiyama, M. Ikawa, 1988: Evolution and Fine Structure of a Long-lived Meso- α -Scale Convective System in a Baiu Frontal Zone, Part II: Meso- γ -scale Characteristics of Precipitation. *J. Met. Soc. Japan*, 66, 351-371.

Ogura, Y., T. Asai and K. Doi, 1985: A case study of a heavy precipitation event along the Baiu Front in Northern Kyushu, 23 July 1982: Nagasaki heavy rainfall. *J. Met. Soc. Japan*, 63, 883-900.

渡部浩章, 1984: 昭和58年7月豪雨の解析. *天気*, 31, 739-746.

Watanabe, H. and Y. Ogura, 1987: Effects of orographically forced upstream lifting on meso-scale heavy precipitation: A case study. *J. Atmos. Sci.*, 44, 661-675.

渡部浩章・栗原和夫, 1988: 島根県南西部の豪雨の解析—昭和60年7月6日—. *天気*, 35, 615-624.

日本気象学会1991年度春季大会の報告

日本気象学会1991年度春季大会は、1991年5月22~24日に気象庁で行われた。参加者数は過去最高の581名で、うち一般会員が437名、学生会員が98名、会員外の参加が46名であった。第2日の午後には、総会に続いて、学会賞と藤原賞の授賞式と記念講演があり、「炭素循環を考える」というテーマで大会シンポジウムが行われた。また、大会前日と最終日に4つの研究連絡会による個別の研究会が4件開かれた。なお、大会参加費は2000円(一般会員)に改定された。

講演件数はやはり過去最高の285件で、うち第1種講演が196、第2種講演が81、ポスターが8であった。第2種講演として申し込まれた講演のうち、予稿の書き方が第2種の要件を満たさないためプログラム編成時に第

1種に変更されたものが30件あった。このような予稿チェックは今後も行いう予定である。

大会は無事終了することができたが、改善を要する問題も少なくない。特に、会場の混雑は年々ひどくなってきており、この点には講演企画委員会としても問題意識を持っている。大会そのものの性格づけや、研究発表のあり方については、会員にアンケート(6月号参照)をお願いし、会員のご意見を参考にしながらよりよい大会のあり方を検討していきたい。

今大会事務局として大会準備・運営にご尽力頂いた東京大学の皆様には深く感謝致します。

講演企画委員会